

兵庫県内私立幼稚園における英語あそび（活動）の 導入状況のアンケート調査結果

Survey Results on the Implementation of English-Language Activities in Private Kindergartens in Hyogo Prefecture

眞 崎 克 彦

要 旨

本稿は、幼稚園、認定こども園における子どもの英語あそび（活動）についての情報を調査し、小学校以降の外国語教育にどのように連携を図れるかを考察している。データ収集のために、兵庫県私立幼稚園協会に所属する幼稚園、認定こども園にアンケートを実施し、状況の把握と分析を行った。その結果、英語あそびを実施している園では、子どもが英語を楽しむことを第一義とし、母語を大切にしながらも、多様性を受け止める資質を伸ばしたり、コミュニケーション能力を育成したりすることに視点を置いていることが明らかになった。指導者は、外部の英語母語話者を招聘しているケースが多く、教諭が指導することはほとんどなかった。また、外部指導者の指導を子どもと楽しめることが肝要であるという意見が散見された。指導のコンセプトについては、アンケートによって、小学校中学年と非常に近いことが明らかになった。このことにより、幼稚園、認定こども園と小学校以降の外国語教育との接続については、滑らかに行える示唆が得られた。

キーワード：英語あそび 幼稚園 導入状況

1. はじめに

2020年度より、小学校に教科としての外国語あそび（英語）教育が導入され、4年が経過した。しかし、子ども¹（子ども、幼児、園児、児童）への英語教育の開始時期の見解はさまざまであり、なお議論の余地が残されている。

本稿における調査内容は、「私立幼稚園における英語（活動）の導入状況」である。しかし、その分析にあたっては、「日本の英語教育の在り方を考える上では、幼稚園、認定こども園、保育園の英語あそびや英語活動が子どもの将来的にどのような資質能力の育成を目指すか」という観点で行われる必要があると筆者は考えている。つまり、幼稚園教育や保育と学齢期から高等学校までの一連の流れや接続の中での現状を確認することが、究極的に現在の日本の英語

教育を考える上で必要であるということである。これらのことを鑑みて、本稿においては、学齢期以前の子どものみを対象とするのではなく、学齢期や高等学校の英語教育の目標や方向性からの視点も含めて、議論を進めることにする。

2. 研究の背景

2.1 学齢期から高等学校までの英語教育の目標の概要

2020年度より実施された現行小学校学習指導要領では、外国語の教科化が盛り込まれて現在に至っている。これに先立って、2014年9月26日、英語教育の在り方に関する有識者会議²は、「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告 ～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」において、日本の学校における英語教育の方向性や目標を一つにすることを提言した。この提言を受け、現行学習指導要領では、小学校・中学校・高等学校を通して以下の2つの観点から、一貫した教科等の目標³を示している（文部科学省、2014a）。

1. 各学校段階の学びを円滑に接続させる観点から。
2. 「英語を使って何ができるようになるか」という観点から。

この背景として、2つの理由を同会議は挙げている。一つは、「グローバル化」の進展である。英語が「国際共通語」であるので、日本は、「アジアの中でトップクラスの英語力を目指すべき。今後の英語教育改革においては、その基礎的・基本的な知識・技能とそれらを活用して主体的に課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成は重要な課題。」であるとしている（文部科学省、2014a）。もう一つの理由としてあげているのは、当時の学習指導要領の方向性では、「コミュニケーション能力」の育成が不十分であり、改善の加速化が望まれているということである。折しも2度目の東京オリンピック、パラリンピックの開催が決定し、海外からの参加者、観戦者が見込まれる中、それを契機に英語教育の活性化を図ろうとする意図が以下の記述によりうかがうことができる。「東京オリンピック・パラリンピックを迎える2020（平成32）年を見据え、小・中・高等学校を通じた新たな英語教育改革を順次実施できるよう検討を進める。並行して、これに向けた準備期間の取組や、先取りした改革を進める」（文部科学省、2014a）。

小学校から高等学校までの外国語活動、外国語の目標における2014年時点での共通点は、「外国語を通じて、言語や文化について（体験的に理解を深め）、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図（り/る）」である（文部科学省、2014b）。つまり、一言で外国語活動と外国語科の目標を述べるならば、「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」ということになるのである。ただし、発達段階により小学校では、「体験的に」学ぶことが求められており、中学校・高等学校では、この文言が省かれている。小学校中学年、高学年、中学校、高等学校、各段階でのそのほかの違いは、「コミュニケーションを図ろうとする能力」の認識の発達段階を考慮し違った表現で示されている。小学校中学年（外国語活動）

では、「外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーションを図る能力の素地を養う(文部科学省、2014b)。(下線部筆者)と、「素地」という言葉が用いられている。小学校高学年では、「身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」と、「素地」が「基礎」という言葉に入れ替わっている。中学校では、「基礎」が、取れた上に、「身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができる」と、コミュニケーションの話題の範囲は、学習者の身の回りに限られ、複雑で高度なコミュニケーションの内容を求められてはいない。一方、高等学校では、「身近な話題」が、「幅広い話題」となり、「理解や表現、簡単な情報交換」が、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりする」と段階を踏んで認知的に高い目標へと進んでいる(文部科学省、2014b)。その後、文部科学省(2018)は、高等学校の改訂を行うに当たり、付録によって学校段階別一覧表を示すことになる。

2.2 幼稚園教育・保育の「内容と領域」と小学校以降の英語の目標の関係

前節では、学齢期から高等学校までの、英語教育の方向性や目標について概観した。本節では、就学前の保育と教育に焦点をあて、幼稚園教育・保育の「内容と領域」と英語あそびや活動の関係について考察する。ここでは、幼稚園教育要領(文部科学省、2017b)、幼保連携型認定こども園教育・保育要領(内閣府・文部科学省・厚生労働省、2018)、保育所保育指針(厚生労働省、2017)の3つの要領・指針を比較してみることにする。(以下、「要領と指針」とする。)

幼稚園は、満3歳からの受け入れであるので、それぞれの教育・保育施設の教育・保育のねらい及び内容を満3歳以上で比較してみると、「子ども」、「幼児」の教育・保育対象者の呼称は異なるが、「ねらい」及び「内容」とも、ほぼ同じ文言で示されている。領域が「健康」(心身の健康に関する領域)、「人間関係」(人との関わりに関する領域)、「環境」(身近な環境との関わりに関する領域)、「言葉」(言葉の獲得に関する領域)、「表現」(感情と表現に関する領域)の5つに分かれているのも同じである。文部科学省、厚生労働省、内閣府と管轄は異なるが、同一国内で同年齢の教育・保育であるので、教育の機会均等の視点から考えると基準として「ねらい」と「内容」が同じであるのは理解できる。

ここでは、小学校以降の外国語教育の目標が、「要領と指針」の5領域のどの「ねらい」と「内容」と結びついていくかを検討することにする。小学校、中学校、高等学校の外国語の目標で中心になるのは、「言語活動を通して」、「コミュニケーションを図る(素地/基礎となる)資質・能力の育成⁴⁾」である(文部科学省、2018)。そこで、「言語(活動)」「コミュニケーションを図る資質・能力」を基軸に「要領と指針」を鳥瞰すると、それぞれが5領域の中の、「人間関係」と「言葉」に多くの接点が見受けられた。そこで、本稿では、小学校以降の外国語教育の目標と5領域の「人間関係」と「言葉」の2つの領域に相応の接続点を見出せるものとし分析を進

めるものとする（図1参照）。

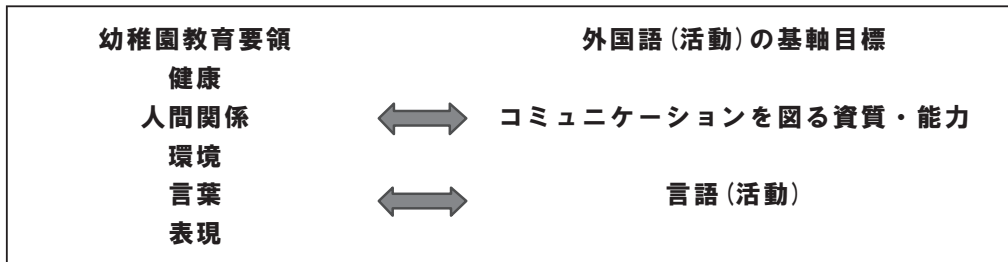


図1 幼稚園教育要領の5領域と外国語（活動）の目標の対応

表1は、「英語あそびで身に付ける領域」（幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容を抜粋要約したもの）から、「人間関係」と「言葉」について「ねらい」と「内容」を抽出したものである。「関連」の列には、想定できる関連性の強さを◎、○で示している（表1参照）。

表1 英語あそびで身に付ける領域と内容

領域+A	人間関係: 他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う。	関連
人間 関係	ねらい	
	・園での生活を楽しみ、自分の力で行動することの充実感を味わう	○
	・身近な人と親しみ、かかわりを深め、愛情や信頼感をもつ	○
	・社会生活における望ましい習慣や態度を身に付ける	◎
	内容	
	・先生や友達と共に過ごすことの喜びを味わう	○
	・自分で考え、自分で行動する。自分でできることは自分です	○
	・いろいろな遊びを楽しみながら物事をやり遂げようとする気持ちをもつ	○
	・友達と積極的にかかわりながら関係を深め、喜びや悲しみを共感し合い、思いやりを持つ	○
	・自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く	○
・友達によさに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。友達と共通の目的を見出して工夫したり協力したりする	◎	
・良いことや悪いことがあることに、決まりの大切さに気付き、考えながら行動する	◎	
・高齢者をはじめ地域の人々など、自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ	◎	
領域	言葉: 経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞くこととする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う。	関連
言葉	ねらい	
	・自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう	◎
	・人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう	◎
	・日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、先生や友達と心を通わせる	○
	内容	
	・先生や友達の言葉や話に興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりする	◎
	・自分の考えたことや感じたこと、欲求を言葉で表現する	◎
	・人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す	◎
	・親しみをもって日常のあいさつをする	◎
	・絵本や物語などに親しみ、興味をもって聞き、想像をする楽しさを味わう	○

2.3 日本と海外の英語教育の導入時期、幼保への導入の調査意義と本研究の目的

わが国が小学校の英語教育を教科化するまでには、紆余曲折があった。臨時教育審議会答申が1986年に初めて日本の小学校の英語教育を俎上に載せてから、35年近くたってようやく小学校での教科化が始まった。そのような中、小学校低学年や幼稚園・認定こども園、保育園等の教育施設・保育機関で英語を「内容」として取り上げることには、賛否があると考えられる

し、まだまだ時間がかかると予想される。

視点を移し、海外の英語教育の開始時期を見ると、小学校3年生から実施しているのは、中国（2001年から）、韓国（1997年から）、台湾（2001年から）であり、欧米では、フランスが、2008年から小学校1年生に導入している（樋口、2023）。つまり、近隣諸国でも、3年生からの導入が多いようなので、日本において、早々に低学年に導入時期の移動が行われるとは、現時点では考えにくい。一方で、現実問題としては、幼稚園等の教育施設・保育機関での関心の高まりも散見されるようである。実際、筆者の住居の近隣の幼稚園では教育内容に「英語」を含めている施設が少なからず見受けられる。このような状況の中、小学校と幼稚園・認定こども園、保育園の「言葉」（小学校以降の「言語（活動）」に対応）や、「人間関係」（小学校以降の「コミュニケーションを図る資質・能力」に対応）に関する接続を考えると、幼稚園等の英語あそびや英語活動の実施状況、ねらい、内容等の調査とその考察を行うことは日本の英語教育を考える一助になると考える。

この研究の目的は、次の2つである。

- (1) 幼稚園、認定こども園における英語あそび、英語活動の実施状況を調査し、実施率、方法、ねらい等について現状の分析を行う。
- (2) 幼稚園、認定こども園において育成を目指している領域の力が、小学校や中学校、高等学校の外国語教育に、どのように連続していくのか、幼稚園等で実施する際にそのねらいを達成するためにどのような配慮が必要なのか、その理想的な方向性について考察する。

3. アンケートの実施と分析

3.1 アンケートの目的と実施方法の概要

前章で示した本研究の目的を達成するために、兵庫県内の兵庫県私立幼稚園協会所属する施設にアンケートを実施した。実施するにあたって提示したアンケートの目的は、以下の3点である。

- (1) 幼児教育における英語教育の実態を調査し、各園における英語教育指導者のニーズを探る。
- (2) 英語教育実施園における保育士・幼稚園教諭として求められる英語力について分析を行う。
- (3) 上記(1)、(2)から得られた情報を基礎資料としてシラバスを作成し、カリキュラム設置について提案を行う。

ただし、本稿における研究目的は、前章で示した2点である。アンケートの目的で本稿の目的からそれる(2)「指導者として求められる英語力」、(3)「シラバスの作成とカリキュラム設置の提案」については、機会を改めて行うものとする。

アンケートの実施は、2023年（令和5年）1月から同年2月末日であった。アンケートの送信施設数は、兵庫県私立幼稚園協会に加盟している幼稚園（202園）である。送信は、協会

連絡便を利用して送付し、返信は、返信用封筒を使い郵便で依頼した。返信を受けた数は、99園であり、有効回答数は、93園であった。

3.2 アンケートの内容の概要

アンケートの質問内容の概要は、以下のとおりである。

- (1) 現在「英語指導プログラム」を導入しているか。
- (2) 導入していない園の理由や状況
- (3) 幼稚園での「英語指導」についての考え（重点）
- (4) 英語指導における教諭・保育士に求められる資質・能力
- (5) 実施園への指導関連質問
(英語教育のねらい、対象年齢、頻度と時間、指導者、指導内容、指導方法)

3.3 アンケートの回答の分析と考察

3.3.1 英語遊び・活動の実施数と目的や方針

表2と図2は、回答送付園における英語遊び・活動の実施数である。全ての園が送付していないので、正しい比率を表しているとは言えないが、少なくとも見積もっても3分の1の園は実施していることになる。この結果から、ある程度の割合で実施されていると想定できる。

表2 実施園と未実施園数

実施	61
未実施	32

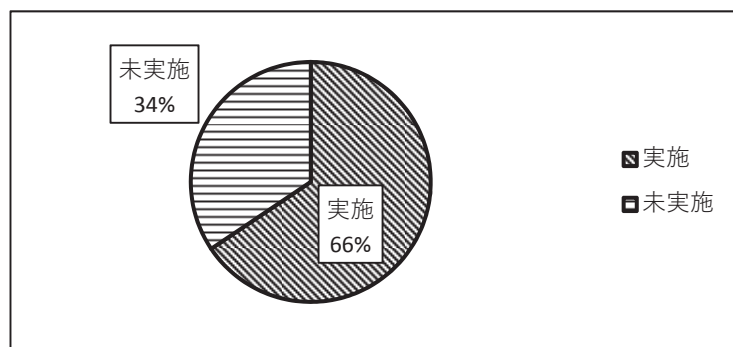


図2 実施園と未実施園数

表3と図3は、未実施園の実施していない理由やその状況である。未実施園では、その主な理由は、「幼稚園教育での導入に肯定的でない」である。未実施園の67%がこの理由を選択している。その他の理由としては、以下の理由の記述があった。

- ・今の園のプログラムに入ってくるゆとりがない。

- ・課外時間に希望者を対象にECCジュニアをR5年度より実施の予定
- ・以前、宣教師の外国人の先生による、英語あそびを取り入れていた。土地柄（異人館街）外国の子どもも多く、外国語に触れる機会も多いが、現在はまず母国語に触れることも大切なので園では導入していない。
- ・コロナ禍前までは外国人講師に月1～2回英語遊びとして指導してもらっていたが、分散登園や休園、学級閉鎖等で登園日数が減り、英語の時間を確保するのが難しくなった。
- ・以前、英語教室を行っていましたが、応募者が少なくなり廃止したため。

表3 実施していない理由・状況

(1) 導入を検討している。	0
(2) 興味があるが、具体的には決まっていない。	5
(3) 幼稚園教育での導入に対して肯定的ではない。	22
(4) その他の理由	6
計	33

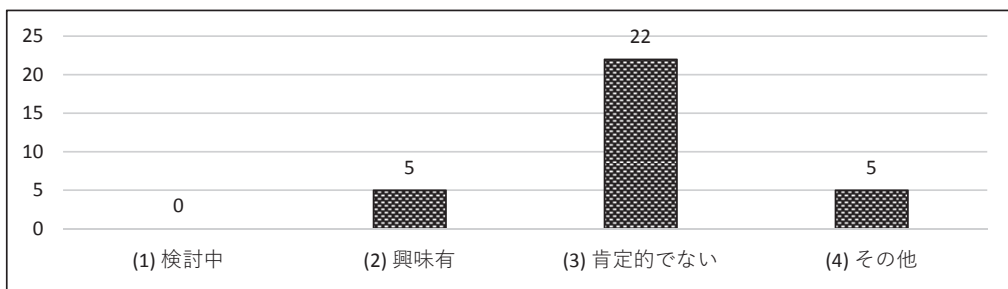


図3 実施していない理由・状況

未実施の施設においては、子どもの保育、教育において英語遊びの導入に疑問を持っていることが理由として多く挙げられているが、カリキュラム上あるいは、ニーズの問題も含まれていることが明らかになった。

表4と図4は、園児・幼児に英語指導をする目的や方針の結果である。目的や方針の考え方については、実施園と未実施園で、一見差が見受けられるようである。つまり、実施園では、外国語への慣れ親しみを導入のねらいにしており、未実施園では、母語を重視して保育すべきだと考えていると推察できる。しかし自由記述では、実施園も母語を重視した上で、国際化・グローバル化に対応できるコミュニケーション能力や、多感な時期に多様性を受け入れる心の柔軟性を育成したいという願いから実施していると記述している。グローバル化への対応では、実際の園の状況の紹介があった。これは、小学校以降の外国語の目標と一致した考えである。

表4 園児・幼児に英語指導をする目的や方針

	(1) 将来英語力	(2) 慣れ親しみ	(3) 母語優先	(4) 母語重点
実施	3	55	1	1
未実施	0	7	15	8
計	3	62	16	9

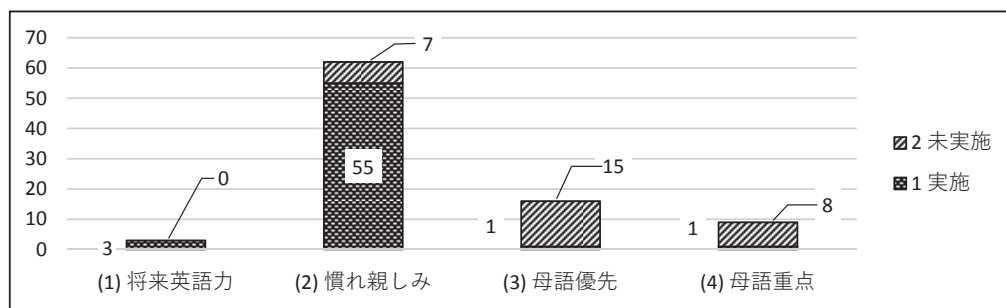


図4 園児・幼児に英語指導をする目的や方針

以下に、英語遊び目的や方針に関する自由記述の意見を上げる。

《アンケート「英語遊び目的や方針」自由記述》

- ・外国語（英語）に慣れ親しむことは大切だが、日本語も大切にしている。英語指導はあくまで遊びの一環である。
- ・様々な研究で、まずは母語を身に付けることの重要性は明らかである。（海外子女教育の各団体も母語の重要性を訴える冊子を作成している）また、より高度な母語を身に付けた後に学ぶ方が、より高度な外国語を身に付けることができ、生涯年収もより高くなることも横断的な研究結果が出ている。以上の事から、日本在住でバイリンガルを目指し、幼児期から外国語を学ばせる早期教育には否定的なスタンスである。しかし、発音や肌の色が違う人がいることなどへの興味関心は、多感で多様性を受け入れる柔軟性がある幼児期に触れておくことは重要だと考える。また、地域の公立小学校・英語母語話者の英語教諭が指導することは、小学校で再開し、子ども達の興味が継続しやすいことから効果的だと考える。
- ・母語を一番大切にしておりますが、コミュニケーションを人としてスムーズに取る一環として、英語指導を取り入れています。
- ・小さい頃から英語に親しんでいる子どもも多く、園生活の中でも遊び、刺激の一つだと考えている。
- ・母語を大切にしていくことは、この幼児期にこそだと感じます。しかし、これからの世代では、外国語も話せるくらいになるのも大切だと感じます。

- ・(2)に○をつけましたが、基本は母語であると思っています。その上で、英語に触れる機会を設ける、耳から自然に入ってくる環境を作ることが大切だと思います。
- ・小学校の授業でも必須科目であることから、そこで初めてとなるよりは、聞いたことがあるとなり、少しでも自信をもって取り組めるようにしたいため。
- ・英語を聞いて「ダメ」と思って逃げ出すのではなく、理解しようと相手の話に耳を傾けられる子供にと思います。
- ・英語が話せるというのは、先のことでいいと考えます。それよりも、外国の文化を受容し、知ることが大切だと感じるからです。在籍者百名足らずの小さな幼稚園ですが、保護者には、アフリカ系、東南アジア系、北米出身者が数名います。宗教・文化さまざまです。少子化の中で、日本に流入してくる外国人は益々増えると考えます。英語に触れることはやはり必修の条件になると思います。
- ・正しい発音を幼児期から耳から入れることで身につけやすい。
- ・異文化に触れることは良いと思うが、幼児期にはもっと経験してほしいことが多い。
- ・英語の歌やゲーム等で、英語に触れる機会はあってもよいと思いますが、それ以上は必要ないと思います。
- ・異文化に慣れ親しみ、理解を深めるため
- ・今後小、中学校へ進学した際に、抵抗感なく英語に接することができるよう、幼児期に英語をはじめ、異文化に触れることが大切と考え、英語指導を行っております。

英語あそびの目的や方針に関する自由記述を概観すると、母語の発達を最優先しなければならないという考えを基軸に置くことの大切さは明確である。その上で、異文化に触れたり理解したりすること、多様性を受け止めたりする資質や能力を育むこと、コミュニケーション能力を育成する一つの手立てとしての英語あそびであることを重視する考えが述べられている。

3.3.2 教員や保育士に求められる資質・能力

表5から表9と図5から図9は、英語あそびや英語活動を指導するうえで教員や保育士に求められる資質・能力について、「発音」、「あそびのバリエーション」、「英語を使ったコミュニケーション能力」、「カリキュラムの専門性」、「ティームティーチングをするにあたっての英語を使ったコミュニケーション力」をどの程度重視しているかについての回答の結果である。

表5と図5は、教員や保育士に求められる資質能力のうち指導者の「発音」の「明瞭性」の重要度の考えについてのアンケートである。「発音」が明瞭であることは、(1)とても大切と(2)やや大切で、88.0%を占めている。この結果から、「発音の明瞭性」は指導者の資質として、重要視されているということが分かる。自由記述の意見からは、「明瞭な発音は、そのほかの専門性と同様に、外部からの指導者に任せている」、「楽しく活動させることが大前提である」、

「内部教員に発音も含めて専門性を求めることはむずかしい」という意見もあった。

表5 指導者の「発音の明瞭性」の重要度

	(1) とても	(2) やや	(3) あまり	(4) まったく
実施	30	21	8	2
未実施	22	8	0	1
計	52	29	8	3

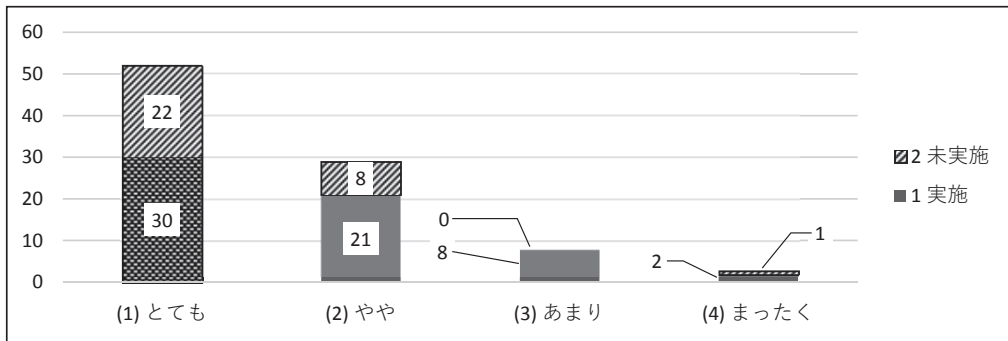


図5 指導者の「発音の明瞭性」の重要度

表6と図6は、指導者として、(英語)遊びのバリエーション(ねた)が豊富なことが重要であるかについてのアンケートである。遊びのバリエーションも発音の明瞭性同様、重要視されているが、発音の明瞭性に比べると、若干重視していない傾向がある。

表6 指導者の「遊びのバリエーション」の重要度

	(1) とても	(2) やや	(3) あまり	(4) まったく
実施	29	22	6	3
未実施	14	15	1	1
計	43	37	7	4

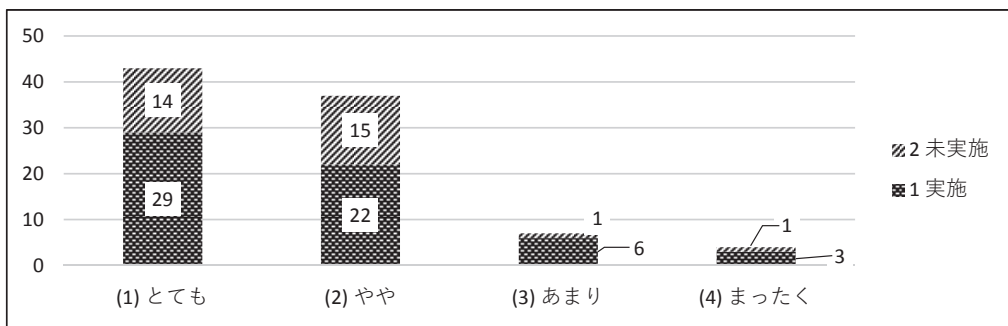


図6 指導者の「遊びのバリエーション」の重要度

表7と図7は、英語を使った積極的なコミュニケーション能力が重要であるかについてのアンケートである。

ンケートである。(1)のとても割合が少ないが、これは、「発音の明瞭性」の項目と同じく「内部教員に専門性を求めることはむずかしい」という理由からと推察できる。

表7 指導者の「英語を使った積極的なコミュニケーション能力」の重要度

	(1) とても	(2) やや	(3) あまり	(4) まったく
実施	18	32	9	2
未実施	8	18	4	1
計	26	50	13	3

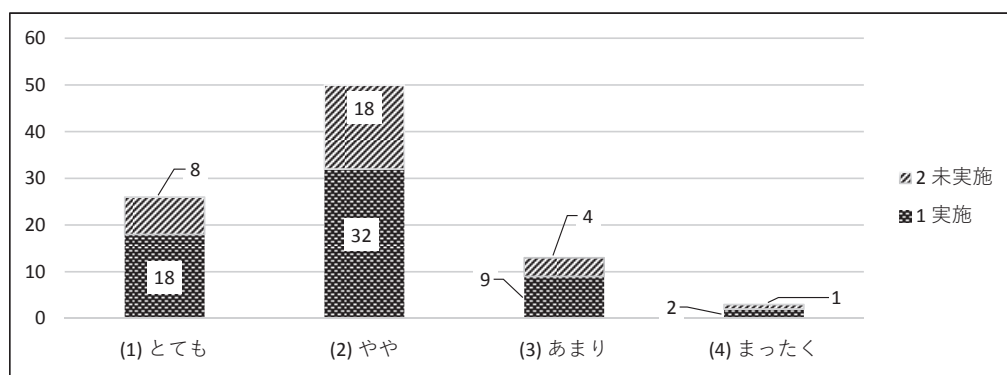


図7 指導者の「英語を使った積極的なコミュニケーション能力」の重要度

表8と図8は、各園独自のカリキュラム作成などの幼児英語教育に関する専門性を身に付けていることが重要であるかについてのアンケートである。実施園、未実施園共この項目に関しての重要度は低い。英語の運用能力や、指導に関する専門性を求めるのは難しいと感じていると推察される。

表8 カリキュラム作成などの専門性の重要度

	(1) とても	(2) やや	(3) あまり	(4) まったく
実施	9	30	21	1
未実施	10	16	4	1
計	19	46	25	2

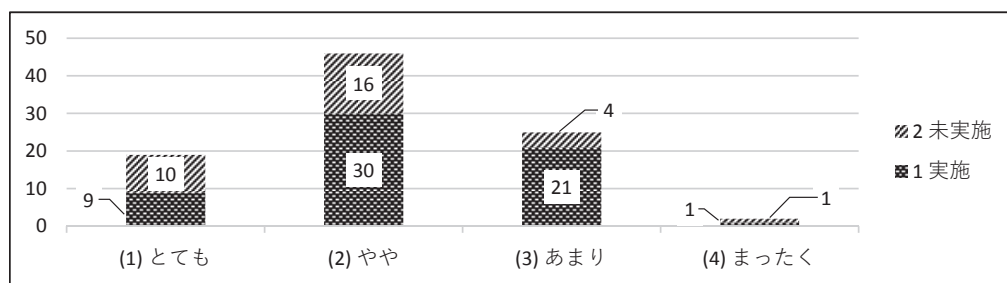


図8 カリキュラム作成などの専門性の重要度

表9と図9は、講師の英語母語話者とティームティーチング（TT）で教えたり、打ち合わせしたりできる会話力の重要度を問うている。この項目についても、「発音」や「遊びのバリエーション」に比較してそれほど重要度は高くないといえる。これは、「英語でのコミュニケーション力」や「カリキュラムの専門性」同様、ハードルが高い課題のようである。ちなみに、小学校においてもこの課題はハードルが高い状況である。

表9 TTでの講師とのコミュニケーション力の重要度

	(1) とても	(2) やや	(3) あまり	(4) まったく
実施	8	33	16	4
未実施	10	15	5	1
計	18	48	21	5

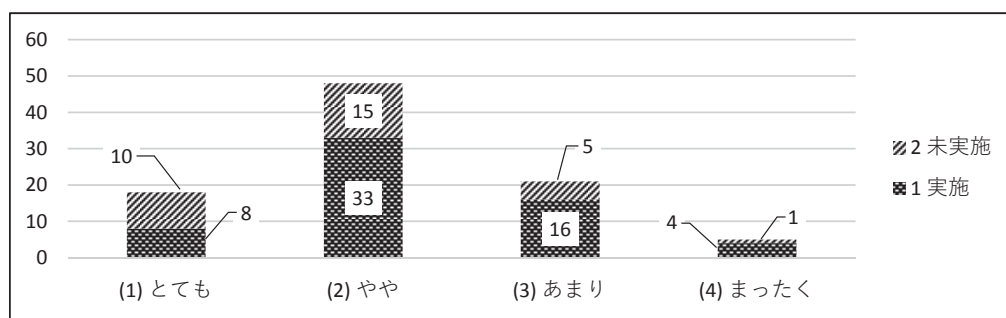


図9 TTでの講師とのコミュニケーション力の重要度

以下に、教諭・保育士に求められる資質能力の自由記述の意見を上げる。

《アンケート「必要とされる資質能力」自由記述》

- ・英語に慣れ親しむ上での発達段階の理解。英語母語話者と楽しそうに話したり、遊んだり、見本になれる（子どもの）保育力。理解できていない子へのサポートに入る保育力。
- ・遊び心、礼節、親しみやすさ、前向きな行動、正確な発音、広い視野
- ・たくさん褒めることのできる先生
- ・どんなに発音が良くても、素晴らしいカリキュラムであっても、一番は“英語の時間は楽しい”と思えることだと考えています。楽しいからこそ、興味が出るし、前向きに取り組めると思います。子どもの気持ちをひきつける“英語の時間”にするためにいろいろ考えて下さる先生を望みます。
- ・講師と教諭間のコミュニケーションは、英語を使わずとも非常に大切であると考えます。
- ・苦手であっても、英語母語話者教諭のカリキュラムに、子ども達とともに積極的にかかわり楽しめる資質。
- ・講師の英語母語話者と打ち合わせ出来る者がいれば、全教諭・保育士には英語に関する能

力は求めなくて良いと思います。

- ・専門性は、講師（日本人）にお願いしています。保育士に求められるのは、講師との意思疎通を図ることだと思います。
- ・楽しむ気持ちだけあればと考えている。
- ・上記の求められる資質能力は、専任講師対象であり自園の教諭に求めるものではありません。
- ・表情、動作などノンバーバルなコミュニケーション能力を含めた資質。
- ・英語での保育は、ECCの外部講師（外部委託）に依存しています。
- ・英語の講師が外部から来るので、子どもたちと一緒に英語を受ける感覚でいいのではないかと思う。英語、英会話力というより、子どもと一緒に楽しめる人であれば、そちらの方が重要なかなと感じる。
- ・英語は専門の講師（特に外国人）が良いと思っています。現保育教諭等に英語の資質能力を向上させるような時間、余裕は正直なく目の前の事をこなすのが精いっぱいな現状です。ですが、小学校にあがれば英語もはじまるので、専門の講師に来て頂いての英語遊びは復活したいと思っています。
- ・幼児期では耳から入る情報が理解を深め興味を持たせることになると思います。ネイティブの指導者がごく自然に音楽を多く指導に取り入れているのを見るとリズムや軽快な歌などある程度こなせる能力も必要かなと感じます。
- ・幼稚園教諭として園児と向き合うに当たり英語指導者の立場より、まず、幼稚園教諭として幼児教育全般の知識、経験が大事と考える。英語で遊ぶタイムの教材カリキュラムは、幼稚園教諭に英語の専門性を求めなくて実施できる物を選び、ネイティブ指導者（英語を母語とするor同等の者）がベストと考える。
- ・英語を幼児期から指導することへの理解
- ・何より「楽しい！」が重要と考えています。「話せる」は課外教室で。通常保育では歌やゲーム等で楽しい時間がすごせればと思っています。
- ・こどもにとってどうなのか。こども中心に考えて。楽しく自然に身につくといいですね。授業ではなく、やらされているではなく・・・。

必要とされる資質能力に関する自由記述を概観すると、まず、指導者が活動を子どもと一緒に楽しむことが大切ということであり、活動を子どもと楽しむことが資質・能力であるということである。あるいは、子どもにとって楽しい活動になるように発達段階に即して援助したりする保育力を身に付けて行くことが重要であるということである。英語あそび指導に関する専門性については、「現保育教諭等に英語の資質能力を向上させるような時間、余裕は正直なく目の前の事をこなすのが精いっぱいな現状です」という意見にあるように、多忙な中、非常に難しい課題であることが理解できた。

3.3.3 実施園の状況

表10と図10は、英語あそび・活動の「ねらい」についての質問である。前項（3.3.2）での質問の回答で得られた結果がそのまま反映されている。つまり、ねらいは、「楽しむ」ことであり、それには、教諭や保育士と一緒に楽しむということ含まれると推測できる。そのあと、コミュニケーション力の育成、異文化理解と続くが、これらは、先に述べた5領域の内、「人間関係」の範疇にあたるものと考えられる。これらの回答も、小学校以降の外国語の目標の「コミュニケーションを図る（素地／基礎となる）資質・能力の育成」と接続していると考えられることができる。

表10 英語あそび・活動のねらい

	親しみ	コミュ能力	異文化	言葉気づき	情宣	英会話	その他
ねらい	56	39	37	32	15	5	3

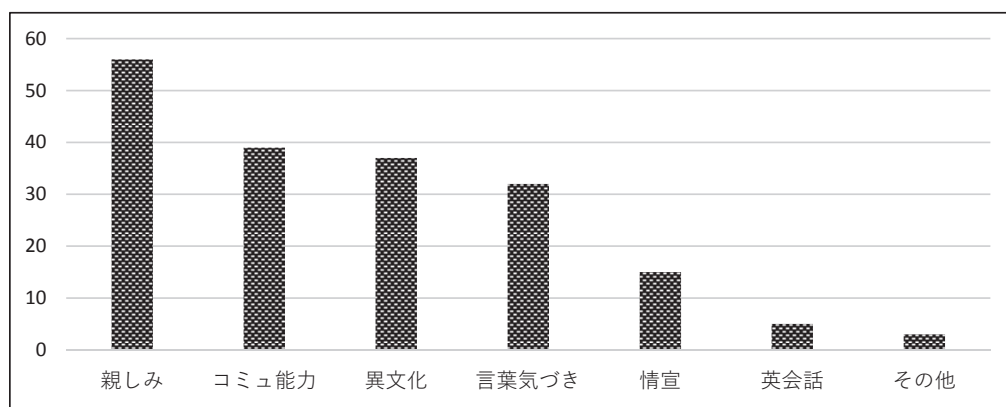


図10 英語あそび・活動のねらい

表11と図11は、対象年齢を示している。年齢が高くなるほど、対象者は増えている。

表11 対象年齢

	(1) 3未満	(2) 3歳児	(3) 4歳児	(4) 5歳児
年齢	15	40	55	61

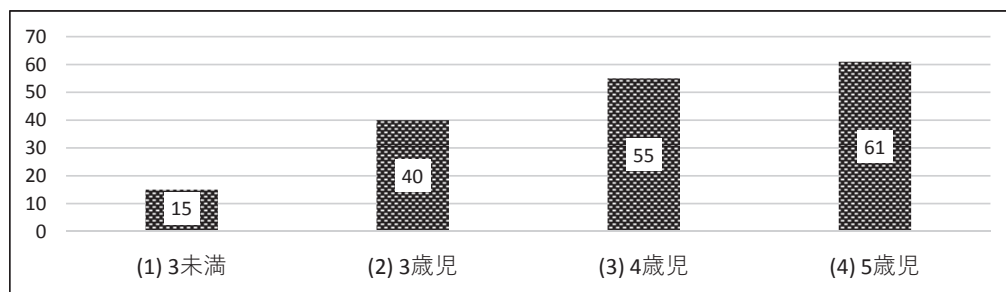


図11 対象年齢

表12と図12は、実施頻度を表している。月に1回ないしは、2回の頻度が一番多く、週に1回が次に続く。月に1回ないしは、2回の頻度で、76.9%を占めている。年に数回の指導が0であることから、ある程度継続的に実施されていると考えられる。

表12 実施頻度

	年に数回	月1,2	週1	週2,3	毎日	その他
頻度	0	28	22	6	4	5

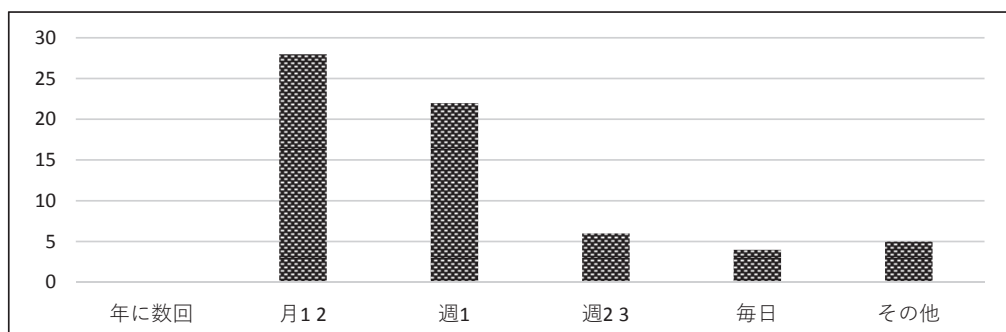


図12 実施頻度

表13と図13は、1回あたりの指導時間を表している。30分が一番多く、次に20分と続く。1時間は子どもの集中力を考えると長いと考えられる。30分と20分で全体の90.1%を占めている。

表13 1回あたりの指導時間

1時間	30分	20分	10分	その他
2	41	17	2	2

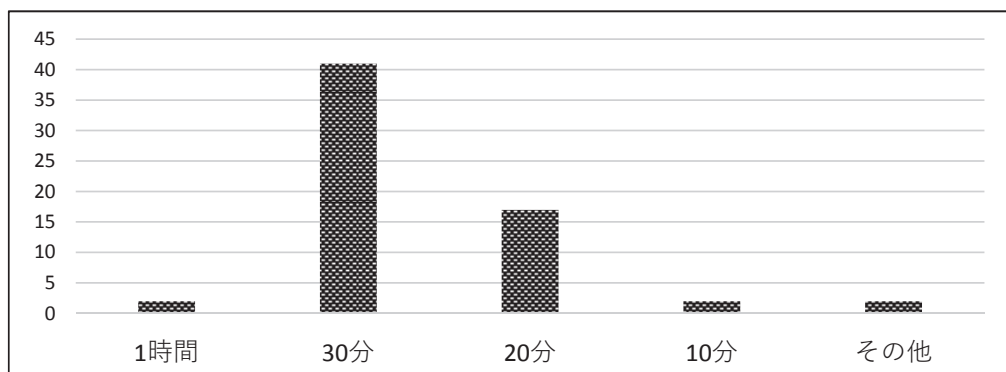


図13 1回あたりの指導時間

表14と図14は、主な指導者を調査した結果である。企業から派遣された母語話者と個人事業の母語話者の比率が高い（約47.9%）。このことから、指導者間のコミュニケーションの滑らかさより、発音を重視していると考えられる。

表14 主な指導者

	企母	個母	企日	個日	園日	TT園	その他
指導者	22	13	12	5	3	3	15

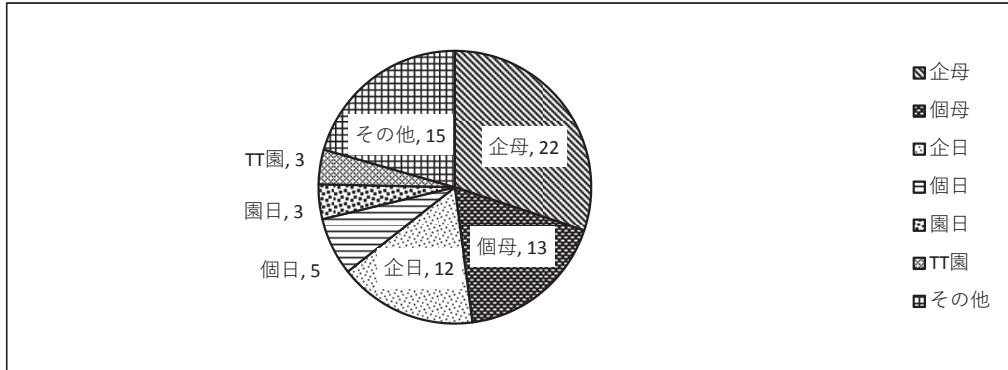


図14 主な指導者

(1) 企母＝企業から派遣された英語母語話者、(2) 個母＝個人事業の英語母語話者、(3) 企日＝企業から派遣された日本人指導者、(4) 個日＝個人事業の日本人指導者、(5) 園日＝園に所属する指導者、(6) TT園＝(1) から(4) と(5) のチームティーチング (6) その他

表15と図15は、指導内容を表している。挨拶には、内容に自己紹介も含む。日常生活の内容は、天気、曜日、食事、体の部分等である。園の生活（園生活）の内容は、園のあそび、活動、道具、遊具等である。挨拶と日常生活で全体の49.6%を占めている（図15参照）。これらの内容も子どもの実態に即した内容であり、小学校の外国語教育との連関をイメージできるものである。

表15 指導内容

	挨拶	日常生活	行事	気持体調	園生活	その他
内容	57	56	45	37	23	10

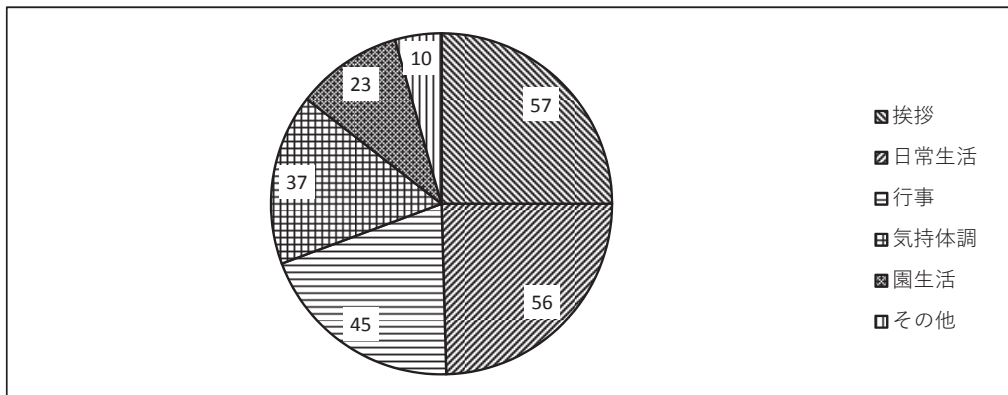


図15 指導内容

表16と図16は、指導方法の調査の結果である。最もよく使われる指導方法/教材は、音楽、ゲーム、身体活動である。これら3つの指導方法/教材で全体の72.0%を占めている。これらは、小学校の中学年でも多く利用されているものである。絵本は33件利用されているが、これも小学校でよく扱われる教材である。工作は、3年生の外国語活動、5,6年生の外国語科でカードづくりとして指導されている。つまり、幼稚園等の施設で扱われているこれらの教材も将来的に小学校でつながっていくものである。

表16 指導方法の調査

	音楽	ゲーム	身体活動	絵本	市販教	工作等	その他
方法	53	52	49	33	15	6	6

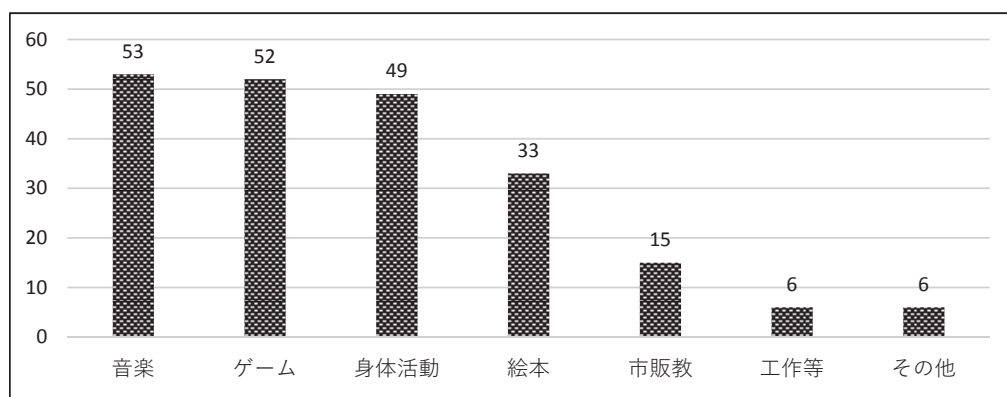


図16 指導方法の調査

指導方法の調査については、その他たくさんの具体例の例示がなされた。例えば、海外の文化や遊び、フォニックス、季節に合った単語、ダンス、アルファベット、数字、日常会話等であるが、それらの教材を手作りしている例も見受けられた。

4. 研究のまとめ

この研究の目的は、次の2つであった。

- (1) 幼稚園、認定こども園における英語あそび、英語活動の実施状況を調査し、実施率、方法、ねらい等について現状の分析を行う。
- (2) 幼稚園、認定こども園において育成を目指している5領域の力が、小学校や中学校、高等学校の外国語教育に、どのように連続していくのか、幼稚園等で実施する際にそのねらいを達成するためにどのような配慮が必要なのか、その理想的な方向性について考察する。

研究目的の(1)の現状の把握については以下のとおりである。実施率にあたっては、202園全

てから回答があったわけではないので明確にはできないが、60園余りが実施しており、かなりの割合の実施率であることが推察できる。ねらいについては、幼稚園教育要領の5領域に照らして考えると「人間関係」と「言葉」と対応すると考えられる。特に「人間関係」については、小学校以降の外国語教育の目標の「コミュニケーションを図る資質・能力の育成」とまさに釣り合うものである。そして、「母語を一番大切にしておりますが、コミュニケーションを人としてスムーズに取る一環として、英語指導を取り入れています」と意見があったように、実施する際の一つのポイントとして捉えられてられていることも明らかになった。

さらに、実施にあたっては、子どもが楽しむことを一番に考え、指導者も子どもと一緒に楽しむことを大切にしたいという考えが散見できた。日々の忙しい業務の中で、英語の指導に関する専門性を高めることは難しく、外部から英語母語話者等の指導者を招聘して実施するのが実態にかなった方法であることも明らかになった。国際化やグローバル化が進展し、園の保護者や園児の中にも多国籍の人々が存在する実態があり、コミュニケーション力を育む必要性に加え、文化や言語の多様性を理解し受容できる人間性の涵養を実感している意見もあった。

研究目的の(2)の小学校以降との接続については以下のとおりである。まず、「コミュニケーションを図る資質・能力の育成」という点では、共通しており円滑な接続のための前提は、整っていると感じられた。さらに、英語を楽しむことという点についても、学校教育として英語が導入される小学校でも大切な要件であるので、この点についても望ましい形と考えられる。また、「指導者が楽しむことが大切」ということについても、英語教育を専門としない学級担任が指導しなければならない小学校と同様の状況であることが分かった。前回の学習指導要領が改訂され高学年に外国語活動が導入された際にも、担任が学び手のモデル役を演じることが提唱されたが、まさにそのことと一致していると感じた。

指導者、時間、頻度、教材（内容）については、現時点での小学校中学年と類似している点が多い。現行の小学校の外国語教育では、言語活動に重点が置かれているが、それでも、ウォームアップや復習、言葉の定着を図るための活動では、歌やチャンツ、ゲームは頻繁に利用されている。3年生では、Hello Song で振り付けをしながら歌うことも定番である。まとまった分量の英語を聞かせる目的での絵本の活用もされている。このようにしてみると、幼稚園等で楽しみながらした活動は、小学校への接続に大きく貢献すると考えられる。

今回の調査を通じて、幼稚園等と小学校の英語教育の間に多くの共通項を発見できたのは大きな成果であった。しかし、筆者の幼稚園、認定こども園、保育園の教育や保育に対するの知見や実態把握の不十分さから、適切な質問項目でアンケートできなかったという問題点も明らかになった。特に、英語教育に関する指導については、幼稚園等の指導者は、幼稚園教育や保育の専門性を発揮しながら子どもと一緒に英語を楽しむことが大切だという回答には得心することができた。今後は、さらに実態の正確な把握に努めていきたい。

《注》

1 本稿では、子どもという言葉を用いた以下の範疇にとらえることにする。

3歳まで・・・子ども、幼児

3歳から6歳まで・・・子ども、幼児、園児

小学生・・・子ども、児童

※「子ども」という言葉は、上記の範疇に照らして、文脈で読み取ってほしい。また、中学校、高等学校生は、「生徒」と記述している。

2 2014年2月4日、当時の下村文部科学大臣によって発足された日本の英語教育政策や次期学習指導要領を考える上で、きわめて重要な委員会

3 教科等となっているのは、小学校においては、3、4年生では「外国語活動」を学習するのであり、教科としては5、6年生の「外国語科」を履修することになっているからである。ちなみに、「外国語活動」は「領域」である。

4 「コミュニケーションを図る（素地/基礎となる）資質・能力の育成」は、2014年に、英語教育の在り方に関する有識者会議が示した「コミュニケーション能力」を受けて、現行の指導要領で示されている目標である。

謝辞

この度の調査につきましては、たくさんの貴重なデータを兵庫県私立幼稚園協会様よりいただきました。おかげさまでたくさんの示唆を得ることができました。

参考文献

内閣府・文部科学省・厚生労働省（2017b）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』

https://www.mhlw.go.jp/web/t_doc?dataId=00010420

accessed 2024/1/16

樋口忠彦（2023）『最新小学校英語教育入門』研究社。

文部科学省（2014a）『今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm

accessed 2023/11/1

文部科学省（2014b）『小・中・高を通じた目標及び内容の主なイメージ』

https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2014/10/10/1352461_01.pdf

accessed 2023/11/1

文部科学省（2018）高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 平成30年7月外国語編英語編【付録8】

「外国語活動・外国語の目標」の学校段階別一覧表

https://www.mext.go.jp/content/1407196_26_1.pdf

accessed 2024/1/16

文部科学省（2018） 幼稚園教育要領

https://home.childcareweb.jp/docs/h29_kyouikuyouryou.pdf

accessed 2024/1/16